平和は手のひらにある

中三　笠井　大暉

「どうして、私たちは平和に生きていくことができないのだろうか？　なぜ、戦争やテロというものが今も起こり続けているのだろうか？」

先月、私は現地校でテロのことについて、改めて学んだ。今までなんとなく聞きかじっていた程度の情報から新たに勉強したことでかつて知らなかった色々なことが分かってきて、とても興味深くなってきた。しかし、知れば知るほどに、どうしても自分の中で湧き起ってきてしまう一つの疑問が生じる。それが、最初に記した「なぜ、人類は平和に生きていくことができないのだろうか？」という大きな疑問だ。「皆が望んでいる世界平和というのはただの夢にしか過ぎないのだろうか？」

私は、その歴史の授業が終わってから、その自らの中から湧き起ってきてしまった疑問のことをずっと考えてしまっていた。それから、何日もその質問は、自分の頭のどこかにこびりついて、ずっと考えるとはなく考え続けていた。そんなある日、昼食の時間に私はいつものように母の作ってくれたお弁当を何気なく食べていたとき、それは、ふっと頭にひらめいてきた。平和とは、とてつもなく大きなことの様だけれど、考えてみれば私たち一人一人が仲良く手を取り合っていくことなのではないかと。もしできるならば、相手の喜ぶことをしてあげることができるならば、争いなど起こらないはずではないかと。そう考えてみることで、なんだかとても遠くにあったように感じた世界平和というものがとても近くに感じられてきたような気がして、とても明るい気持ちになってくる自分がそこにはいた。

平和と言えば、私はどうしてもこの人が最初に浮かんできてしまう。それは、マザーテレサという方だ。マザーテレサは貧しい家庭に生まれたものの幼いころからずっと世界平和を望んでいた。マザーテレサも最初は私たちの様に普通の少女だった。誰からの助けもなく頼る人もいなかった。でも、自分を信じて身近の人を愛した。マザーテレサは私たちに向けてこのようにメッセージを、残してくださっている。

「豊かな国ほど飢えが目につきます。物質的な貧しさより、心の貧しさです。まず、家族の愛からはじめてください。やがて、家庭から外へと愛の輪が広がっていくでしょう。」と。そして、それは、ほかの誰かがするのではなく、「まず、あなたからはじめてください。」と。

そして、マザーテレサ、たった一人から始まった愛の波がどんどん広がって、幼いころからの彼女の強い決心がノーベル平和賞を受賞するところまでたどり着いたのではないかと思った。最初、彼女がたった一人でできたのなら私たち一人一人も必ずできるはずではないか。

平和を築いていくためには、まず相手の事を考えたら良い行動へとつながっていくと思う。

先日、祖父が日本からニューヨークへ来てくれたとき、彼の７９歳の誕生日を家族みんなで祝った。普段祖父は真面目で本ばかり読み、あまり話さないのだが、この時、祖父は真剣な目で私、姉そして弟に戦争の時の貴重な体験の話をしてくれた。今まで本で読んだり、又はインターネットでしか戦争の実体験を垣間見たことがなかったが、今回初めてその場で祖父から戦争の実体験を聞いた。

祖父は東京に両親と兄で住んでいたが、空襲を避けるために宮城の山奥へ兄とともに疎開した。彼は疎開したものの、食べるものがなく毎日がとても大変だったと話してくれた。

その後、祖父は疎開先が合わなかったようで体力を落とし、具合がとても悪くなったことから東京へ戻った。でも、東京も焼け野原の状態で明日生きられるか分からない状態で生きていたそうだ。祖父は話の最後に、色々な国の人たちや様々文化の違いなどから、なかなか一つの意見にまとめていくのは本当に大変なことだろうと。そこには、時には意見のぶつかり合いもあるだろうと。でもどんなことがあっても「戦争だけは絶対にしてはいけない。」と語ってくれた。私はこのセリフが今でもはっきりと頭に浮かぶ。

「戦争はするな。」その言葉がずっとずっと私の中で今もこだましている。

今、世界に目を向けた時、今も争いの中に置かれている人たちがいる。いつも命の危険にさらされ、明日生きているのかさえ分からない様な中で、生きているような人たちがいる。その人たちに、いったい今自分は何ができるのだろうか。

まずは、兄弟や家族や学校の友達や地域の人たちや、そうやって少しずつて、手と手を結びあって一つの大きな和を創っていったときに、いつか必ず世界平和は実現できると信じている。世界平和は遠くにあるのではなく私たち一人一人の手の中にあるのではないか。

英語の本から日本語の本へ、翻訳の難しさ

W校　中等部二年　武神　美奈

私は読書が大好きだ。しかし、アメリカに長い間住んでいるため、読む小説はすべて英語だ。

数年前から日本で過ごす夏の間、英語で読んで気に入った本を日本語で読むことに決めた。去年はバーシージャックソンとオリンポスの神々とオリンポスの英雄、そして今年はダイバージェントとハリーポッターを日本語で読んだ。去年読んだ二つのシリーズは英語に比べるととても長かった。そして今年読んだダイバージェントでは主人公のイメージが英語で読んだときとだいぶちがった。さらにハリーポッターはとても長くて、シリーズで一番好きな本が途中であきてしまった。

英語の本が日本語に翻訳されただけなのに、なぜこのような大きな差を感じたのだろう。

人が何を言うにしても、どの国の言語も複雑だ。世界中の人が同じことを知るために翻訳するのはもっと複雑だ。どの国の言語も少し違っているため、本や映画などがほかの言語に翻訳されるときはその長さと意味が少しずつ変わる。本が英語から日本語に翻訳されるときも同じことが起きる。

訳される話によるが、日本語の本のほうが普通は百ページから二百ページ長い。日本語の本の文字の大きさは英語のより小さいのに枚数が多い理由はいくつか考えられるが、その一つは会話を入れる時の行替えだ。どの言語でも、小説などで会話が出てくると話すたびに一行替えるルールがある。どの本でも縦は横より長いから違いはそこではない。

しかし、各国により文章の書き方がちがう。英語の正しい書き方は左から右へ左右に書く方法だが、日本語の正式な書き方は右から左へ上から下に書く。これで毎回会話が出てくるたびに一行変えていったら、英語で書いて

いるときの失うスペースは日本語で書くときの失うスペースよりはるかに少ない。その少しの差が積み重なって大きい差になる。

また、どの国の言語でも全部の言葉、ことわざ、四字熟語などの的確で直接的な訳語はない。つまり、どんなに上手な翻訳者でも二つの言語でまったく一緒のキャラクターイメージを作るのは無理だ。

英語で自分のことを話すときは年や性別に関係なく、使われる言葉はIとME、そしてその同じ言葉の変形だ。それとは逆で、日本語だと女性は普通「私」や「うち」、そして男性は「俺」や「僕」などを使う。その上、小さい子供たちは自分を自分の名前で呼ぶときもある。

日本語では自分の呼び方と同じように文末も、性別によって変わることがある。普段のしゃべり方ではあまり差がないが、小説などで書かれているときは女性のキャラクターはほぼ毎回「よ」か「わ」で終わる。しかし、男性のキャラクターはたまに「さ」か「ぞ」で終わるが、ほとんど話すときと変わらない。性別で話し方を変えると登場人物のイメージが大きく変わる。たくましい女子が英語で書かれていると勇敢に感じられるが、そのたくましい女子が「よ」と言うとたくましさがなくなる。各言語には個性的な部分があるが、翻訳することで重要なイメージを変えてしまうことがある。

本などは翻訳されるたびに変化していく。しかし、キャラクターのイメージを保つことは重要で、本の長さをほぼ同じにしておくのも同じくらい重要ではないだろうか。それと同時に、それぞれの言語のユニークな部分を見せることも大事だ。言語は難しくて複雑だが、それが本だけでなく、伝えたいことを国を超えて世界中のものにするための壁になって欲しくないと思う。

「戦争の原因」

ニューヨーク補習授業校W校6年2組

榎井　心太郎

テレビやインターネットのニュースを見ているとと中東やアフリカで戦争が起こっているというニュースを毎日のように聞きます。そして、その戦争を止めるためにアメリカが爆弾を落としているという非惨な事が行なわれています。これは、深惨な問題だと思いました。そして、ぼくはそのニュースを聞いているうちに、なぜ戦争は起きるんだろうと疑問を持ちました。

その疑問を持った後、ぼくは本やインターネットを使って戦争の原因を調べました。そして、理由は二つありました。一つ目は世界の国々は、「戦争は、外交の手段だ」と思っている事です。例えば石油が欲しいから、石油を持っている国と戦争をするとか、戦争をすると儲かるからとか、国土を増やしたいからなどです。二つ目は、戦争による「デフレ型の不況から脱却するためです。まず、デフレ型の不況と言うのは何かを説明します。まず、企業は景気が良い時には、いくらでも売れると思ってたくさんの物を作ります。でも、たくさん物を作りすぎると、そのうち売れなくなります。売れ残りが増えてくると、企業は在庫を減らすために値下げします。しかし値下げしてもあまり売れません。買い手は、もっと待てば、もっと値下がりするだろうと思って買い控えをするからです。売れ行きが悪くなると、企業はもうからなくなり、労働者の賃金を低くしたり、解雇により労働者の数を減らしたりします。人々は、貧しくなると消費を抑えようとします。その結果、物はますます売れなくなり、物の値段はさらに下がってしまいます。こうして景気がどんどん悪くなることをデフレ型の不況と言います。そしてデフレ型の不況から脱却するには、増えすぎた物と企業者を減らさなければいけません。

しかし、だからと言って、政府が自分の国の企業が作った物を壊したり、社会の役に立たない働いていない人を殺したりしたら国民から非難されてしまいます。そこで、政府は敵対関係にある国を悪者扱いにして、国民が不況の不満をぶつける標的を作り上げます。悪者扱いされた国も同じ事をして戦争が起きます。戦争が起きると、国民は一致団結して外からくる危機に立ち向かおうとするようになります。政府の指導者に対する国民の支持率も上がります。仕事がなくて困っていた人も兵隊としてやとわれるようになります。かたみの狭い思いをしている失業者にも戦争で手がらを立てて出世できるチャンスが来ます。だから死ぬ危険性があっても、募集すれば兵隊が集まります。

これらの事実を知って、ぼくは真っ先に、戦争に巻き込まれている人々の姿を思いうかべました。国民の中には、戦争はしたくないと言う人がいたと思います。でも「戦争は、

20×20

をより多くの人に伝える事です。戦争の怖さを知っている人や、戦争を体験した人がまだそれを知らない人達に伝えなければ戦争がまた起きてしまうかもしれません。そして、後世にも伝えていかないと、未来の世界で戦争が起きてしまうかもしれません。

今の世界は、平和だと思いますか。ほとんどの人は、今の世界は平和だと答えるでしょう。たしかに、昔と比べたら、戦争はとても少ないと言えるでしょう。でもぼくはそうは思いません。なぜならまだ戦争が起こっているからです。それは、今もなお戦争で人が何人も死んでいると言うことです。みなさんは、戦争や紛争がない平和に満ちた世界にしたくはないですか。そうするには、ぼくたちが少しずつでも戦争の怖さを知らない人達に伝える事が大事です。そうすれば、未来は美しく、平和に満ちた世界になっているでしょう。

20×20

反対だ」など政府にしたがわなければ殺されたり、ばつを受けなければいけません。だから、戦争をしたくない人達も戦争を応援していました。ぼくは、子供が一番かわいそうだと思いました。なぜなら、ぼくたちみたいにスポーツをしたり、欲しい物を買ってもらえたり、勉強できないからです。戦争中の子供達は、一日中、畑で親の手伝いをして学校に行けなかったりしていました。戦争中の学校は、なにより体をきたえる訓練をしていました。兵士にさせるための色々な訓練をさせられていました。だから、一日二時間ほどしか勉強ができませんでした。一日二時間ほど勉強をした後、畑や田んぼの手伝いをさせられていました。訓練はできるようになるまでやって、体がボロボロになるまでやっていました。そして、授業の内容はすべて戦争の事でした。

ぼくは、戦争の原因を調べてみて、自分たちにもできると思った事は、「戦争の恐ろしさ

20×20

銀なんみたいなくさい足

L工校 五年一組

大日方 柊

ぼくの足はくさい。ある日、お母さんがさけんだ。

「くっさ――」。

ぼくは何のことか分からず、「はあ。」と首をかしげた。そこでお母さんが、ぼくの足を指して、しぶい顔をした。どうやら、ぼくの足はとってもくさいらしい。ぼくは思った。

「全然くさく感じないのに……。」試しにお父さんのとなりにすわってみた。

「においが殺人的。」

と言われた。手であっち行けされた。弟の周にかがせてみた。あおててにげ出した。ねこのトトにもやってみた。

「シャ――」。

ねこパンチをくらった。お母さんに

「これは公害です。足を洗ってきてください。」

と言われてしまった。ぼくは足を洗いながら

思った。「そんなにくさくないのになんでだろう。ちぇーー」でもとにかく、みんなからするとぼくの足はすごくくさいんだって。そう、銀なんみたいなくさい足。このことは家族の大きな問題になってしまった。しょうがないから原因をさぐってみた。

ぼくが考えたのは、汗をすごくいっぱいかくし、学校でくつをぬぐ時がないから、汗がたまって、においがすごくくさくなるんじゃないかなという事。「でもどうだろう。インターネットで調べてみよう」ぼくは興味がわいてきて、「くさい足の原因・男子」と入力してけんさくしてみた。すると……、なんとぼくはまちがっていた。実は、ばいきんが足に生えてくさくなるらしい。「ばいきんー・ばいきんってどうやって足に生えるのでおかしくないてぼく大じょうぶかな？心配だな。」ぼくはあせって解決法を調べた。

インターネットによると、ブリーチを水でうすめて足をつけるといいらしい。ばいきんが死ぬらしい。でも人間の皮ふにはもともとばいきんがいるらしい。ちょっと安心した。

「なんかプールの水みたいだな」と思いながら足をブリーチ水につけた。たわしで指の間足のうらをごしごし洗った。洗いながら思った。「これでみんなからくさいくさいと言われなくなるぞ。よっしゃーー」気になる結果は……。パーフェクト。風上で足を上げても何も言われない。みんながぼくの足のにおいをかぐ。

「おーーー」

みんながおどろいた。

「無しゅう。プールの後みたい」

これはみんなに喜ばれた。そしてはく手が起きた。

「銀なん足よ、ようなら」と思ったけど、毎日洗うのがめんどくさい。歯をみがくのよりも、ねぐせを直すよりもめんどくさい。ぼくは家族でめんどくさがり屋で有名。「はぁいやだな。毎日、毎回、これやるのか」そしたら友達のお母さんも

「うちの子の足もくさいんだよ」

と言ってた。ぼくは思う。「じゃあぼくふつうじゃん。このままでもいいじゃん。大じょうぶ、大じょうぶ」なんだかんだ言っても、ぼくはみんなにくさいと言われたり、みんなのその変な顔を見るのも好きだ。さらに、やっぱりこの銀なんみたいなくさい足が大好きだ。だから……。

「銀なん足よ、おかえり」

20×20

20×20

ひとまねけいくん

W校　二年三組

しまなみ　れい

私には二才の弟、けいくんがいる。けいくんは、名前が私ににているせいか、私のまねばかりする。私が本を読んでいると、上下さかさまの本を弟も読むふりをするし、私がえいごをならっていると、弟もめちゃくちゃなことばをしゃべる。

12×12

20×20

そんな弟が生まれてくる前は、

「どんな子がおなかから出てくるんだろう」。

「早く生まれてこないかな」。

「手をつないで歩きたいな」。

と、毎日まちどおしかった。

ところが、生まれてみると、昼も夜もないてうるさいし、顔をひっかかれたりして、すごく大へんだった。

二才になった今もなきいき

だし、わがままなので、よくけんかもする。

「お姉ちゃんなんだからがまんしなさい」。

と言われ、お父さんやお母さんをとられたような気がして、

「けいくんなんて生まれてこなければ良かったのに」。

と言ってしまったこともあった。

でも、夜になって、とな

りのふとんですやすやとねむる弟のね顔を見ると、

「もうちょっとやさしくしてあげたら良かったな」。

「あしたから、もっとあそんであげようかな」。

と、ときどきこうかいする。

それに、いっしょにあそんでいると、一人よりももり上がって楽しいし、学校から帰ってきて

「れいちゃん、お帰り！」

とだきついてきてくれたときには、ほんとうにかわいいなと思う。

まねばかりされて、うっとうしいこともあるけれど、やっぱり私は弟が大すき。

私が良いことをたくさんしたら、ひとまねけいくんも良い子になってくれるのかな。

おっぱいちゃん

1年1組

梅沢花

わたしはもうすぐ七さい。まいとしかみさまにたのんでいたげんきな妹がやっとおうちにやってきたよ。

でも、うまれたばかりの赤ちゃんがいるおへやにはじめてはいったときは、すごくかなしくなってないちゃったの。どうしてかっていうと

こするのがだいすき。だってやわらかくてかるいから。くねくねする。ぺたぺたする。もじもじする。へらへらする。わたしは舞におどりながらおうたをうたうのがすき。舞はわたしをみてにこってするから。わたしは舞にチューするのがすき。だってすごくやわらかくてかわいいから。わたしは舞とおなじへやでねるのがす

舞のまわりに、マミーとダディーとばばとグランマとグランパとたーくんとアンティとアンティのボーイフレンドがいたけど、だれもわたしのことをみないで舞のほうをみてたからびっくりしたの。

舞はマミーのおっぱいばかりたくさんのむよ。アムアムしている舞はとてもかわいいよ。わたしは舞をだっ

き。よるギャーギャーなからねむれないけどいっしょじゃないとさびしくなっちゃうから。学校からかえってくるときに、舞とマミーとばばがバスていてまってくれるからおうちにかえるのがたのしいよ。

舞がもうすこし大きくなったら、やさいスープをたべさせてあげるよ。わたしは、チョコレートがすきだけど



暴君が学んだこと

L I校高等部二年一組

カイザー玉青

気まずい空気に部屋が包まれた。目の前にはここ何週間も練習をサボっていた怠け者がいた。できれば避けたい会話だったのだけれども、仕方なく彼の返事を私たちは待っていた。彼は口を開けて、「男子の意見も聞いてよ」といった。

その言葉は今でも忘れられない。言われて初めて、劇の準備をしているときの自分がどれほど暴君のように振舞っていたか気づかされた。他人の能力を信じられず、自分の理想ばかりをクラスメイトに押し付けていたことに。その言葉を言われるまでは、私はわがままな子供のように自分で全てを決めて、クラスメイトを指導していた。

その居眠りをしていた生徒を攻めたときに言われたあの言葉で目が覚めた。それまでは、どうせ男子は劇の手伝いなんかやらないだろうと思っていた。適当に役割分担をしてそれをこなしてもらうだけでいいだろうと思っていた。でもその言葉を言われてはじめて自分のリーダーシップのとり方の間違いに気づかされた。

融通の利かない支配者の下ではいい物は作れない。本当のリーダーは、大人は、一緒に仕事をしている全員の意見をちゃんと聞き入れて、その意見を尊重する。

意見も聞いてもらえないのに男子が私のために頑張ってくれるはずがない。今まで随分とわがままで勝手なことばかりしていたことに気づき、恥ずかしくなった。話し合いの後、私は男子の意見も積極的に取り入れる形で劇を作り上げるよう心がけ、男子も情熱を取り戻してくれ、劇は大成功に終わった。

私はグループで何かをするとき、私以外は誰もいないと思い込んでしまう癖があった。今回補習校で行った劇だってそうだった。毎年恒例の卒業生を送る会の出し物に困っていたときに、国語の授業で太宰治の「走れメロス」読んだ。読んだ後に全員で感想を話し合っていると、みんな徐々に熱くなってきて、面白いパロディーのアイデア等も出てきた。最終的には「走れメロス」の劇を出し物でやろうとみんなできめて、作業を始めた。

劇をやろうと最初に言いだした私はなんとなくリーダーのポジションを背負い、台本やら大まかな演出はサクサクと四人いる女子で決めて行った。そのうち、初めはとても乗り気だった男子がみるみるとやる気を失っていった。特に一人の男子生徒は練習の間に居眠りまでし始めた。

あれ以来、私たちのクラスは卒業生を送る会の出し物は毎年劇と決まっている。でも私の役目は少し変わった。一人で作ったものを押し付ける暴君からみんなの意見を吸い上げ、そこから良いものを選び出し、ごちゃ混ぜのアイデアを一個のまとまった劇にしていく役目に。考え方を変えてから私はいつもほかの人の発想にびっくりされる。こんなにも素敵なアイディアや可能性がほかの人の中眠っているなんて想像もつかなかった。考え方ひとつ変えるだけで新しい世界が見えてくる。

明日を超えて

ニューヨーク補習授業校ｗ校
高等部一年　前田花帆

東日本大震災から、三年がたった。この三年間で、世界や日本の力で、少しずつ東北の復興への活動が進んでいる。しかし、千三百日近くという長い時間がたったにも関わらず、被災者のみんなの心の深い傷は今でも痛み続けている。心の傷は時間だけでは治らない。

今年の夏、私はBeyond Tomorrowという団体を通して、同世代の被災者の話を聞くことができた。この団体には、被災児童を世界のさまざまな国に行かせるというプログラムがあり、高校生や大学生の男女が八人、ニューヨークに来て、日本人会で自分たちの被災当時のことを英語で話してくれた。

聞いている人のほとんどが日本人会の関係者であり、本当にこういう話を聞くべき対象は、違う年齢世代の人だと私は思った。だから、ディレクターの方に、アメリカや他の国の現地校で話をすることがあるのか聞いてみた。その人は、「日本の学校の夏休みが他の国より遅いせいで、あまりそういうことはできないの。でも機会があれば、是非やりたいですね。」と笑顔で答えてくれた。

こういう経験をしている学生たちは、自分と同世代の学生たち、若者たちを相手にして話すべきだと思う。未来のリーダーは今の学生たちだ。この三年間、大変な想いで生きてきたこの子たちの話を聞いて、私も二千十一年の三月十一日に戻ったかのようだった。あの日、私は自分が日本人である事を改めて実感し、私の大事な二つの国、日本とアメリカを繋ぐために頑張っていく事を決めたのだ。

Beyond Tomorrowのメンバー達の決意は、私の決意とは比べものにならないものだったはずだ。人生を立て直し、経験を世界中の人たちに伝えようとしたのだから。いろいろな子と話をしたが、そのうちの一人が、震災前は原発のすぐ近くの福島の町に住んでいた高校三年生の葉月ちゃんの家の地域は立ち入り禁止となってしまった。そして、今でも戻る事は許されていない。家族で神奈川に引っ越す事が急に決まり、彼女はまた高校受験をやり直さなくてはならなくなった。けれど、被災の精神的なトラウマに負ける事はなかった。この話を聞き、私は高校生としての心の強さだけではなく、人間としての強さに驚いた。

神奈川に着いてからのエピソードを聞き、震災で大きな打撃を受けた人たちの苦しみや当時の必死な毎日をほんの少しだけでも感じ取れた気がする。悲しい事だが、震災後は原発の影響で、福島のナンバープレートが付いた車は落書きされたり、窓が割られたり、嫌がらせを多く受けていたらしい。葉月ちゃんたちが神奈川に着いて一番にした事は、福島のナンバープレートを神奈川のナンバープレートに付け替える事だった。新しい高校に転校し、クラスメートが一番に、「どこから引っ越してきたの？」と聞いてきた。彼女は前住んでいたところが福島だというべきなのか迷った。けれど、全部正直に

話したそうだ。怯えずに自分の新しい人生を始め、自分の力で自分の居場所を作ったのだ。

Beyond Tomorrow のプログラムの一つにリーダーシップサミットがある。これは、世界中の様々な分野で活躍している人たちが参加し、葉月ちゃんのような東日本大震災で大きな打撃を受けた学生たちと話をし、未来の東北を建て直すのに自分たちがどう参加できるのかを学生たちと共に考えるプログラムだ。初めて参加したこのサミットで、彼女はあまりの迫力に緊張してしまったそうだ。そのせいで、話したい事を話すことができなかった。後から自分から積極的に発言しなくてはいけないのだと気づき、そしてもう一つ大事なこと、自分に与えられたチャンスは生かさないと、その経験が無駄になってしまうだけであることにも気付かされたと言っていた。それを聞いて私は、自分が最初に彼女たちに話しかけるのをためらっていたことが急にばかばかしく思えた。この時私はこれからは絶対に積極的に何でもやってみる事を誓った。

東日本大震災前には、私たちと同じように、学校に通い、部活に行き、宿題をやり、友達と遊び、将来の夢を見る、そういう普通の毎日を送っていた彼女たち。でも、今は自分たちの人生のすべてに対しての行動力や責任感や想いが以前とは違うはずだ。

日本がこのような大被害を受け、本当に立ち直れるのか疑問に思っている人もいるかもしれない。全体が立ち直るにはまず、一人一人が立ち上がり、前を向かなくては行けない。私が会った Beyond Tomorrow のみんなは誰よりもまっすぐに前を見ていた。振り返らずに、日本や東北の未来の事を考え、そして、その未来のために、いったい自分が何をできるのかを深く考えていた。かわいそうだって思ってほしくない。この経験を自分の心の力として、もっと強い、もっといい自分を見つけていこうと思っているのだ。

私は、こういう人たちの想いや考えを世界中の学生に伝える事が、新しい日本への最初の一歩であると思う。だから、日本が一歩ずつ前へ進んでいけるように、自分の役割を果たしたい。大きな役割ではないかもしれない。けれど、世界が前に進むには、現代の若者たちが明日よりも遠い未来を考えていかなくてはならないのだ。だから、私も明日を超える。そして、もっといい未来を作る、それが私の思いだ。



12×12

した。メープルが作られる小屋まで、三十分ぐらいハイキングをしてつきました。メープルの林の木には、青くて細いチューブがついていて大きなタンクにすいこまれます。たまったメープルを大きなおなべに入れて、まきで火をおこして、グツグツとにつめます。夜中まで続くので、夜中もねむれません。と中で、とう分をとメープルの味がよく出るそうです。うすい色の方のあじは、キャラメルのような味なのでパンケーキにかけるとおいしそうだと思いました。

せつめいの後に、味見をしました。こい色のツロップはあまくっておいしくてつかれがビューンととんでいきました。

帰りもロッジまで三十分

しらべます。と う分が少ないと多くのじゃえきがひつようなのです。二百リットルのじゃえきから、たった三・七リットルしかとれない時もあります。じゃえきをたくさんあつめても、少ししかシロップになるなくておどろきました。

シロップの色も、こい色とうすい色があります。こい色は、りょうりにつかう

ハイキングをしました。と中で細長いえだをひろいました。夜のキャンプファイヤーでスモアーを作るためです。

ハイキングしたりキャンプファイヤーをしたり、楽しいのでまた来年もさんかしたいと思いました。